

大会シンポジウム

「儒者とは何か、文人とは何か―日本漢詩文をめぐる「担い手」の問題」

開催趣旨

近年、「儒者」や「文人」などの語を積極的に用いながら、漢詩文を分析する論考が相次いで発表されている。たとえば、宋晗氏『平安朝文人論』（東京大学出版会、二〇二二年）は、古代の漢詩文の表現を、文人官僚の営為という観点から読み解いている。また、山本嘉孝氏『詩文と経世―幕府儒臣の十八世紀―』（名古屋大学出版会、同年）は、儒者と経世意識などの視点から、近世漢文学の歴史を捉え直している。こうした潮流は、政治などの各時代の現実的な社会との関わりの中で、あるいは、倫理などを含む、より大きな前近代の学問的伝統の中で、漢詩文を考えてゆこうとする動きが盛んであることを示していよう。

そもそも「儒者」や「文人」とは何を意味するのであろうか。これらの語は、我々の日々の考察の中で、その内容がさして吟味されることなく、「詩人（漢詩人）」などととともに、随意に用いられている側面もあるのだが、本来、それぞれの指し示すところは相当異なり、またそれぞれの時代において果たした社会的な役割にも違いがある。こうした漢詩文の担い手をめぐる様々な問題について、今一度振り返り議論してゆくことは、日本漢文学史の理解を深めるためにも重要と思われる。

このシンポジウムでは、以上に見たような、近年の儒者や文人などを切り口とした日本漢詩文に対するアプローチの現状と今後、またその可能性と問題点について、日本史、日本思想史、中国文学などの知見を含めながら、討議したいと考えている。

具体的には、以下の点を中心に検討することを予定している。①儒者、文人と大学寮など、漢文の担い手を取り巻く学問や政治的動向についての知識の更新は、詩文の解釈にどのような影響を与えるのか。②日本漢詩文の歴史は、通常、時代ごとに異なる担い手が想定されることが多いが、儒者や文人を、一つの軸と見定めた場合、どのような時代を超えた日本漢文学史の流れを想定できるか。③儒者や文人を視座とした場合、日本の漢詩文は、東アジアの中で、どのような特殊性や意義を持つのか。

漢詩文の担い手は様々であり、儒者、文人はその一例に過ぎない。また、今回取り上げる古代、近世以外の時代にも、それぞれの興味深い事例があるだろう。これらについては、参加者よりご教示をいただきながら、立体的な議論を構築してゆきたい。

（文責…合山林太郎）

【報告1】文人という人間類型の射程

宋晗（フェリス学院大学）

「文人」は一つの人間のあり方を表す言葉である。漢文とともに東アジア世界に普及し、長期間にわたって使用された結果、時代・地域ごとの特殊性を反映するものとなっている。それだけに、近代以降の文史哲各分野において、それぞれに特有の意味内容を持つ語として捉えられており、従来の文人論では、そうした多様な表れを呈する「文人」を成り立たせる基本条件の選定が課題の一つとなってきた。注意を要するのは、全ての基本条件が必ずしも一定不変のものであったとは限らないということである。社会の発達変遷を経て、次第に不可欠だと認知されるに至った条件もある。本発表では「文人」の基本条件のうち、

特に詩文について、それがいかなる意味内容を持つものとして認識されてきたのかを通時的に検討し、「文人」概念の典型が成立する過程を照射してみたい（「文人」と表記する場合は語義・概念を指すこととする）。

先学諸氏の論考では、「文人」の要件として、おおよそ(一)経典の素養、(二)政治的使命感、(三)詩文(文言の詩と散文)の実作、(四)詩文と琴棋書画を嗜む風雅の精神が挙げられている(吉川幸次郎、一九六三年/村上哲見、一九九四年)。このうち、詩文は(三)と(四)に重複して表れているのだが、これは、「文人」概念と関わる詩文に、腑分けせねばならない二つの側面があると思なされてきたことを示している。すなわち、天下国家の用という公共性と、人文学的教養を身に付けた士大夫の趣味的生活を表す私性である。この二項の併存が、詩文の性質に関わる本源的な図式ではなく、魏晋から宋代にかけて成立し、漸進的に一般化したものであることは、中国文学研究で論じられてきた(川合康三、一九九三年/村上哲見、一九九四年/齋藤希史、二〇〇七年)。重要なのは、そうした詩文の展開と連動しつつ、公人的性質が顕著だった「文人」が私人的性質をも備えるに至ったことである。以上の精神史の流れについて、曹丕『典論』論文、白居易「与元九書」、『宋史』劉摯伝など、詩文と「文人」そのものに関する士大夫の認識が表れた文献を中心に概観する。

【報告2】李白はなぜ江戸時代に人気が出たのか?—近世儒者の自己像から考える—

山本 嘉孝(国文学研究資料館)

近世中期日本で『唐詩選』がベストセラーとなり、盛唐詩を模倣する作詩方法が流行したことは周知の通りである。しかしその淵源には、拙著『詩文と経世—幕府儒臣の十八世紀』で考察を試みたように、その直前の時代、幕府儒臣に拔擢されていた、あるいは拔擢されることを望んでいた庶民出身の儒者たちが、盛唐詩を盛んに模倣しながら盛唐詩人を思慕し、儒者としての自己像を形成していたことがあった。

本発表では、近世前中期の林家・木門・護園の儒者たちが、模倣的な作詩を通して、いかなる古人を思慕し、儒者としての自己像をどのように模索したかを探る。林家の人々は、自身を禅僧と差別化することに主眼を置き、世襲の家ということもあって、平安朝の文人を思慕し模倣した。一方、木門と護園の儒者たちは組織的な後ろ盾を持たずに民間に暮らし、己の才能だけを頼りに、自身を為政者や社会に売り込む存在であり、無頼ともいえる盛唐詩人たち、なかでも李白を思慕し模倣した。

李白は庶民の出自でありながら、一時は卓越した才能と人格を玄宗皇帝に認められ、文書を起草し、国政について諮問を受ける朝廷の役職に拔擢された。しかし、同僚の讒言が原因で朝廷を去ることとなり、民間で作詩と飲酒に没頭した。この経歴は、李白の伝記からも読み取ることができ、詩作の随所にも表れている。近世日本の儒者の不安定な境遇は、李白のそれと重なるところがあり、木門・護園の儒者たちは、李白に共感を覚え、にはいられなかったのではないか。

高貴な生まれでなくとも、自身の才能と努力によって活躍の場を広げてゆこうとする生き方の最良の手本を提供したのは、科擧の無い日本においては、書物に見る唐土の古人たちであったと考えられる。また、このような生き方は、近世日本においては、儒者に限定されることなく、学問を身につけた人々に広く見られるように思われ、漢文学の外に考察の範囲を広げる必要がある。

研究発表要旨

○幽人を訪ねる―嵯峨天皇の「訪幽人遺跡」詩における幽人像を凝視する

クリストファー・リーブズ（早稲田大学）

本発表は『文華秀麗集』第九十三首（五言律詩）にあたる嵯峨天皇作の「同内史滋貞主『追和武藏録事平五月「訪幽人遺跡」之作』」（以降は略して「幽人詩」と称す）における「幽人」という特殊人物の描き方（ありさま）およびその出典を詳細に論じるものである。

まずは、先行研究を踏まえ班固の「幽通賦」や陸機の「招隱士」など『文選』における幽人像を確かめる。『文選』以前に見える幽人像——例えば『易経』のそれ——にも言及する。これによって、中国における『文選』以前の幽人像の伝統的な描き方が明らかにする。

嵯峨御製の「幽人詩」に現れる幽人は『文選』の幽人像を汲みながら、それとは明らかに異なった描き方を示し、幾つか注目すべき言葉が織り込まれ幽人像を一層豊かにしている。首聯の「鎖骨」、頷聯の「煙蘿」と「仙竈」、頸聯の「巖扃」と「石牀」、尾聯の「契道」という表現のそれぞれの出典を探りながら、嵯峨天皇が想像し描こうとした幽人を究明する。

出典調査の結果、嵯峨天皇が「幽人詩」を作るにあたって李嶠の「石淙」や寒山（生没年未詳だが盛唐に活躍）の「自樂平生道」で始まる詩作を参考していた可能性が高いという結論に辿り着く。なお、李嶠の「石淙」（『全唐詩』361）は嵯峨天皇自筆の「李嶠詩」（『百二十詠詩』）に見られず、おそらくは『日本國見在書目録』に掲げている『李嶠集』（佚書）に収録されていた。寒山の『寒山子集』は平安初期にすでに伝来している確実な証拠がないにしても、嵯峨天皇が「自樂平生道」を読んだ跡が「幽人詩」に見いだせることは間接的な証拠にもなろう。要するに、嵯峨帝文壇の詩人たちは幽人像を想像し作り上げる過程において、『李嶠集』や『寒山子集』を意識していた可能性がある。

○『田氏家集』元慶五年作における閑適詩の受容について

根岸賢太郎（筑波大学・院修了）

本発表は、島田忠臣『田氏家集』元慶五年作に見られる白居易閑適詩の影響に着目して、同年における忠臣の不遇や孤独について述べることを目的とする。

『田氏家集』における閑適詩受容について、波戸岡旭氏（二〇一六、初出二〇〇九）は、常に平静なる心を保とうとする禅の意識を閑適詩から学んだとし、岩井宏子氏（二〇〇八、初出二〇〇四）は、「納涼」こそが閑適の最高の境地であり、それを完全に踏襲したのが忠臣の納涼詩であるとしている。

以上の論では、白居易晩年の『白氏後集』（『白氏文集』巻五十一〜七十）の詩が主に影響元として挙げられている。しかし、閑適詩とは、「与三元九一書」において示された古体三分類の一つであり、『後集』においては消失した分類である。下定雅弘氏（一九九六、初出一九八七）により、古体三分類は、江州左遷期の葛藤を基盤として成立しているものであり、その葛藤が静まったことによって、三分類が消失したと指摘されている。

よって、『後集』詩と閑適詩とは性質が違ふものと考え、改めて閑適詩の影響について、『田氏家集』を調査した。その結果、いずれも巻中の「題三東窮居二」（79）「身無三繫累一」（80）の二首に、不遇な現実を「知足」「安分」の境地によって克服しようとする、白居易閑適詩的な詠出の方法の継承が認められた。

これらの詩が詠まれた、元慶五年について、廖栄発氏(二〇一七)は、忠臣が悠々自適な生活を始めた時期としたが、芳賀紀雄氏(二九八八)や滝川幸司氏(二〇一四、初出二〇一一)によれば、兵部少輔に任官されるまで散位であったのではないかと指摘されていること、また、同時期の、「閑適」(73)や、「対_レ竹自伴」(77)から、孤独が読み取れることから、同年の忠臣には苦痛や葛藤があったと考えられる。「閑適詩の影響」という観点から元慶五年の忠臣詩を読み解くことで、これまで見過ごされてきた忠臣の心境について明らかにすることができると考えている。

○「瘴」考―日本古代・中世の「瘴病」と「瘴意識」

黄 弋粟(京都大学・院)

「瘴」は、山川の毒気か南方の毒暑に中って起る「熱病」の一種であり、古代医書においては、常に「瘧病」項に配属される。『類聚名義抄』(観本)では、「熱毒之病」と、その字義が略釈されている。また、『医心方』にしばしば引用される『諸病源候論』の卷十一「山瘴瘧候」では、「其病重於傷暑之瘧」と、「瘴」は普通の瘧病よりも深刻な疾病だと述べられている。一方、「瘴」は詩語としても愛用されていた。別字との組み合わせを通して、「何瘴」か「瘴何」のような新語が作り出された。それによって、南方未開地への差別や流人の自嘲などを詠みこまれる南方風土詩の一群も一層豊富になってきた。

先賢が論じた点は主に「瘴」の名と実の起源、各時代の南方風土詩文における地域概念と差別意識、及び病源・病理と治療法である。起源論をめぐっては、大論争さえ起っていた。それに対して、日本古典における「瘴」の考察は皆無ともいえよう。その理由は、栄西が『喫茶養生記』で述べたように、「日本国大寒之地、故無此難」にあらうか。勿論、「瘴」という言葉自体は早くから漢籍を通して日本人に知られた。例えば、『本朝世紀』承徳二年正月廿七日条には、「兼美作権守、染瘴数日薨」との記録が見られる。

本研究は、「瘴」を病としての「瘧病」と、文学表現としての「瘴」と、大別して論じる。「瘧病」については、『源候論』・『肘后方』や『千金方』など中国の医書、そして『医心方』・『頓要抄』や『福田方』など日本の医書から該当部分を抽出し、その病因・徴候と治療法を史的に整理して分析する。

一方、文学における「瘴」はさらに、願文と禅林文学に二分して考察する。前者については、主に大江匡房の願文(七例)に焦点を当て、さらに『敦煌願文集』(十例)との表現類似性を論じる。後者については、主に五山文学(四十六例)と抄物に注目する。特に禅家が親しい柳・杜・黄・蘇詩からの影響と受容を考察する。

○梁川星巖『西征詩』の諸本と表現

福井辰彦(上智大学)

梁川星巖は、幕末・明治期の日本漢詩を考える上で、極めて重要な位置を占める詩人である。しかし、その詩が十分に精読され、論じられてきたとは言いがたい。本発表では、これまでほとんど取り上げられることのなかった『西征詩』の読解を通して、星巖詩の漢詩としての特質を明らかにする端緒を得られればと考える。

星巖は、文政五年(一八二二)から同九年にかけて、妻・張紅蘭とともに、山陽・九州方

面への大旅行を敢行した。この旅行中に詠まれた詩は、『西征詩』としてまとめられ、文政十一年に刊行される。星巖が世に出した初めての詩集である。『西征詩』の諸本については、中嶋康博氏が自身のホームページ上で、文政十一年版、同十二年正月版、同十二年五月版の三種があることを明らかにしておられるが、本発表では、中嶋氏が触れておられない本を含めて再検討を加え、諸本について整理する。

その上で、本書所収の星巖詩の表現について、特に典拠を用いた作に注目しながら、具体的に分析を進める。

『西征詩』諸本には、本書を編集・刊行した加藤王香が付した注が備わり、星巖の典拠表現を理解する上で、非常に参考になる。この注の助けも借りつつ、星巖詩を精読してみても、まず指摘できることは、中晩唐詩および陸游の詩が、しばしば用いられていることである。しかし、これは同時代の詩人の間に広く共通する傾向と言える。それでは、星巖詩の特徴はどういった所に見出されるであろうか。

そこで、『西征詩』諸本および天保十二年（一八四一）刊『星巖集』乙集（『西征集』）の異同に着目してみると、新たな典拠を取り込むことや、より適切で効果的な典拠表現への差し替えといった変化が認められる。当時流行していた中晩唐詩や陸游の詩を用いながら、それらを自在に運用し、その表現の完成度を高めてゆくところに、星巖の手腕と個性が認められるのではあるまいか。

○次韻応酬による時事漢詩―広瀬旭荘と奥野小山の例―

森 隆夫（早稲田大学・院）

嘉永六年六月、ペリー提督率いる四隻のアメリカ合衆国艦隊は、江戸湾の入り口に位置する浦賀に姿を現した。広瀬旭荘はその翌月、即ち嘉永六年七月、この件に触れる七律一首「七月紀事（七月事を紀す）」を賦す。そこには、隠微な表現の中に、旭荘の主張が盛り込まれた。篠崎小竹亡き後の大阪詩壇の中心者の一人であった旭荘の、時事を扱った詩は恐らく反響を呼んだことであろう。奥野小山は篠崎小竹の梅花社の一員であったが、旭荘の詩に反応した一人であった。小山の詩は、旭荘詩に次韻応酬したものである。小山詩の識語によれば、旭荘は小山詩を激賞したという。本発表では旭荘詩と小山詩を比較することにより、その激賞の理由について、第一に、両者の表現の差異、第二に、旭荘詩の主張に対する奥野小山の理解、又それを自己の詩中に反映させていった手法等を見ながら、明らかにして行きたい。

第一の点であるが、ペリー艦隊について小山詩は「四箇浮城」と表記し、その艦隊が四隻の軍船から成るものであることを明瞭に表現する。一方、旭荘詩は「西師」とのみ表記して、その具体性には触れない。またペリー艦隊来航の目的についても、小山詩は「両邦互市」と明記するが、旭荘詩はこれに触れない。謂わば旭荘詩は具体性を避ける表現に終始した、と言って良いだろう。

第二の点について。旭荘詩の主張は即時攘夷を非とするものであるが、春秋左氏伝を典故とする隠微な手法で為された。これに対して小山は、伍子胥と趙宋の例を挙げる。歴史を典故とする旭荘詩に対するに、小山も歴史的典故によって応酬するのである。

江戸開幕以来初めて、攻撃力を誇示する外国艦隊の出現を眼前にして、文人たちも衝撃を受けたにちがいない。しかし、文人としての自己認識は、状況の掌握と事態への的確な対応の考察へと向かわしめた。その一例を旭荘と小山の応酬に見出した。

○会津藩士南摩羽峯の長篇七古「無題」について

池澤一郎（早稲田大学）

旧会津藩士にして後の東京大学教授羽峯南摩綱紀は、戊辰戦争の顛末を全六十四句から成る長篇の七言古詩「無題」で詠じた。この詩については、早く相田泰三氏が「南摩綱紀の詩」（『会津会報』第八一号、一九七五）に軸装羽峯自筆の書の写真を添えて紹介し、小林修氏がその著『南摩綱紀と幕末維新期の文人論考』（八木書店、二〇一七）で内容を検討し、拙稿「幕末維新期の会津藩士の真情―韋軒・弘毅斎・羽峯の漢詩唱和―」（『早稲田大学文学研究科紀要』第六六号、二〇二一・三）でも言及した。小林氏は『和漢比較文学』第六六号（二〇二一・二）に掲載された講演記録「南摩羽峯の幕末維新と孝明天皇宸翰問題」で、再び本詩に言及、前稿よりも更に内容に踏み込まれた。右の拙稿では、羽峯の「無題」詩が、薩長軍が会津藩領に攻め入る際に靡かせた「錦の御旗」が金糸の刺繍の太陽と銀糸の刺繍の月とで構成装飾されているのを二分して、太陽には京都守護職時代の会津藩と藩主松平容保とに絶大の信頼を寄せた孝明天皇を象徴させ、月には薩長藩閥の傀儡的存在であることを免れなかった少年期の明治天皇を象徴させたとした。さらに、羽峯は明治天皇における「君側の姦」としての薩長藩閥をば、月の光を蔽い隠す暗雲としていと拙稿では考えた。

本発表では、右の先行研究や拙稿において、和漢比較文学会の先生方にご指摘いただいた誤読の箇所を訂正させていただいた上で、さらに拙稿発表時に福島理子氏が示唆された南摩羽峯における頼山陽の受用、本「無題」詩における山陽『日本楽府』の藤原道長を詠じた「月無缺」の趣向を巧みに生かしていることを説明し、本「無題」詩における「月無缺」利用は、尊攘公卿や薩長による孝明天皇の毒殺の暴挙をも諷刺していることを明らかにする。